HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	女性ウェイスト・ピッカーの労働・ケア・実践 山東省東営市東営区を事例に
Author(s)	譚, 天儀
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(人間科学)
Dissertation Number	甲第16980号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16980
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99824
Type	doctoral thesis
File Information	Tianyi_Tan_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（人間科学）　　氏名：譚 天儀

学位論文題名

女性ウェイスト・ピッカーの労働・ケア・実践 －山東省東営市東営区を事例に

本論文の観点と方法

中国経済の急速な発展に伴いゴミ問題が深刻化する中で、数多くのインフォーマルなゴミ拾い人（ウェイスト・ピッカー, Waste Picker）たちが都市の資源ゴミ回収において重要な役割を果たしている。ウェイスト・ピッカーを扱った研究は世界的に数多くあるが、その多くは、ウェイスト・ピッカーがゴミ問題に果たす役割についてなど都市管理の視点に立ったものだったり、インフォーマルセクターとしてのウェイスト・ピッカーを扱うものだったりする。そうした中、本論文はとくに女性ウェイスト・ピッカーの生活世界に注目し、それを詳細に描き出し、さらにそこから彼女たちが置かれている社会構造を研究したものである。中国山東省東営市東営区での長期にわたる参与観察と聞き取り調査を通じて、家庭と社会の二重の周縁化に置かれた女性ウェイスト・ピッカーたちの生存戦略と主体性を明らかにし、さらには彼女たちへの支援策を考察している。

調査は 2019 年から 2024 年の、コロナ禍を含む長期にわたって断続的に行われ、40 名のウェイスト・ピッカー（うち 28 名が女性）の協力を得て、インタビュー調査と参与観察が行われた。

本論文の内容

本論文は 8 章構成である。

本研究の構成と各章における課題は、以下のとおりである。

第 1 章では、現代中国におけるゴミ問題の深刻化と、その解決の一翼を担いながらも社会的に不可視化されているウェイスト・ピッカーの実態についてその概略が論じられたあと、本論文がなぜ特に「女性」に焦点を当てるのかについてその背景が論じられる。その上で、本研究の目的が、女性ウェイスト・ピッカーの生活世界を、労働・ケア・制度的排除の交差という視点から解明することにあることが述べられる。

第 2 章では、東営市におけるゴミ回収の具体的なプロセスと、ウェイスト・ピッカーの経済的実態とが、詳細に分析される。東営市の回収システムは、行政によるフォーマルな流れと、ウェイスト・ピッカーによるインフォーマルな流れの二重構造で成り立っていること、さらには、ウェイスト・ピッカーの仕事様式は、三輪車で店舗等を回る「住宅・店舗訪問型」、ゴミ捨て場で拾い集める「ゴミ捨て場巡回型」、清掃員の傍ら行う「副業型」の 3 つに分類されることが明らかにされる。さらに先行研究においてほとんどなかったウェイスト・ピッカーの収入に関しても研究され、「ゴミ回収」が経済行為として持つ本質が何なのかを考察し、彼らを「敏感な経済的周辺層」として位置づけた。

第 3 章では、どのような人々がウェイスト・ピッカーになるのかという「属性」と「動機」の相関が議論されている。土地収用によって生活基盤を失った「失地農民」、国有企業「勝利油田」の配偶者である「家属」たち、さらには、高齢の農民工などがウェイスト・ピッカーになることが明らかにされる。同時に、ウェイスト・ピッカーになる動機は、差し迫った経済的困窮だけでなく、管理されない「自由」の希求、自立したお金を稼ぎたいという「自立心」、そして独居高齢者にとっては「健康維持」や「暇つぶし」といった多層的なものがあることも示される。

第 4 章では、5 人の女性ウェイスト・ピッカーの具体的な生活史を通じて、ゴミ回収が彼女たちの人生においてどのような意味を持つのかが議論される。夫の早逝後、文字が読めない中で二人の息子を育てる唯一の手段としてこの仕事を選んだ女性、長年のケア労働を経て仕事に復帰した際に時間の融通が利く清掃とゴミ回収を組み合わせることでケアと自身の収入確保を両立させている女性など、多様な様相を見せる女性ウェイスト・ピッカーの生活史とその中でのゴミ拾い労働の位置づけの多様性が論じられる。そして彼女たちの生活史は、ゴミ回収が一律の「労働」ではなく、各人の人生の文脈において、困難に対する「解決策」であり、社会との接点を維持するための「出口」であることが明らかにされる。

第 5 章では、女性ウェイスト・ピッカーたちが直面する最大の構造的課題の一つである「隔世ケア（孫の世話）」に焦点を当てている。中国では公的な保育資源が不足しているため、共働きの子供世代に代わって、祖母が孫のケアを担うことが一般的であり、本論文の研究対象の女性たちの多くも、孫が生まれてから幼稚園に入るまでの数年間、自身の仕事を辞めて無収入でケアに専念する期間を経験している。この無償のケアが、女性ウェイスト・ピッカー自身の老後保障を脆弱にするという「世代間の不平等」を生んでいる。 また、男性ウェイスト・ピッカーが仕事を続けながら断続的にケアに関わるのに対し、女性はケアのために労働市場から完全に一時離脱せざるを得ないというジェンダー格差も明らかにされる。孫が成長して仕事に復帰した後も、送迎や食事の準備という時間的制約が続くため、彼女たちは柔軟な働き方が可能な低賃金のゴミ回収や清掃業に固定されてしまっている。彼女たちが家庭内でのケアの責任と経済的な必要性の狭間でどのように「自立的な収入」を実現しているのかを検討し、このような複数の周縁化を経験している女性たちが、限られた条件の中でどのように自分の労働、時間、価値を交渉しているのかが明らかにされる。

第 6 章では、2020 年から 3 年にわたるコロナ禍が、ウェイスト・ピッカーの生活に与えた影響が考察される。東営市は比較的感染者が少なかったものの、厳格な「ゼロコロナ政策」により、住宅地の封鎖や移動制限が繰り返され、彼らの「仕事場」は構造的に縮小されるなど大きな影響を与えた。コロナ禍は、もともと脆弱であった彼らの生活基盤に、物理的・経済的な二重の障壁を恒常的に作り出すことになった。

第 7 章では、2020 年に正式に導入されたゴミ分別制度に焦点が当てられる。中国では、資源循環型社会の構築を目指して、2017 年からゴミの分別制度が導入された。調査地である東営区では、2020 年 3 月に新たなゴミ分別制度が実施された。この制度では、小区内にゴミ回収小屋が設置され、地域住民から資源ゴミの回収が開始された。ゴミ分別制度は、利便性と正確性の点でウェイスト・ピッカーの役割を上回り、ゴミ分別小屋のスタッフは地域住民との信頼関係も築いている。その結果、ウェイスト・ピッカーの排除が進む可能性があることが指摘される。本章では、目立たない、あるいは無意識的な方法で行われる排除を「静かなる排除」と呼び、ゴミ分別制度がウェイスト・ピッカーに対する「静かなる排除」の一因となっていることを明らかにした。

第 8 章では、これまでの議論を総括し、女性ウェイスト・ピッカーに対する具体的な支援の方向性が提示される。中国のウェイスト・ピッカーが行政からも組織からも無視されている「二重の空白状態」にあることを指摘した上で、支援の柱として可視化・組織化・法制化の三点が提案される。まず、統計データと生活史の両面で彼らを「可視化」し、政策の対象として定義し、さらに、孤立した個人ではなく協同組合や労働組合のような「組織化」を推進して集団交渉力を高めること、そして、ゴミ回収を「承認された労働」として「法制化」し、資源循環体系の重要な参与者としての地位を確立することが求められるとする。また、ウェイスト・ピッカーの多様性に基づいてゴミ回収への収入依存度を「スペクトラム（連続体）」として捉え、経済的困窮層には直接的な支援を、暇つぶし層には社会参加の場を提供するといった、個別のニーズに応じたターゲットを絞った政策が不可欠だと論じる。